様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　25 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：22720033
研究課題名（和文）　ミシェル・フーコーの方法論の再検討

研究課題名（英文）　Reexamination of the methodology of Michel Foucault

研究代表者
箱田　徹（HAKODA TETSU）
立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドクトラルフェロー
研究者番号：40570156

研究成果の概要（和文）：
本研究はミシェル・フーコー（1926-1984）の 1960 年代後半から 1970 年代にかけての著作を分析し、不連続性や差異を強調する独自の方法論が明確化される過程を論じた。とくにフーコーが言説分析にかかわる諸概念を実践の問題系に位置づけたことに着目し、この時期以降のフーコー思想にとって政治的主体性の問いが重要性を占めていくことを指摘した。また一連の思索の展開が「六八年五月」と深い関わりがあることも示した。

研究成果の概要（英文）：
This research focused on the works of Michel Foucault (1926-1984) from late 1960s to early 1970s and described the process where his methodology, with a great emphasis on discontinuity and difference, was being elaborated. The research showed how the question of political subjectivity acquired greater importance in his thought during that period while a series of concepts found in discourse analysis were articulated around the essential question of practice. It also suggested that the events and aftereffects of May '68 played a crucial role for the theoretical elaboration of Foucault's at that time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学、思想史
キーワード：社会思想史、哲学、フーコー、フランス、20 世紀

１．研究開始当初の背景

（1）研究動向

1980 年代から現在に至る国内外のフーコー研究の関心の動向は、権力から倫理、倫理から統治という流れを経た。

1980 年代のフーコーは研究の対象を古代ギリシア・ローマの哲学と社会に移した。現時点から言えば、この「転回」とは、1970 年代半ばの〈規律権力〉論や、キリスト教の告解モデルに基づく西洋近代の主体化の議論の深化のプロセスのことだった。しかし同時

代の読者には経緯がほぼ不明であったため、この新しい主題が「倫理」と呼ばれた。

1990 年代になると、フーコー思想への関心の焦点は〈統治性〉や〈生権力〉と〈生政治〉、〈安全（セキュリティ）〉といった概念群へと移動する。集団としてのヒト（人口、住民）を一定のリスクを備えた集合と見なし、マスとして管理するプロセス（安全型権力）が強調された。

1990 年代半ば以降、一次資料の整備・刊行が進み、1970 年代後半から 1980 年代にかけての後期フーコーの実像を本格的に探ることが可能となり、後期フーコー思想の大きな軸が〈統治〉概念であることが次第に明らかになった。

しかしフーコーの方法論が立ち入って考察されることは実は少ない。確かに〈考古学〉から〈系譜学〉への展開、またはその同居という図式は有力だ。とはいえフーコーの問題設定に迫る作業は限られている。

他方、晩年のフーコーが「ギリシアへの回帰」を行ったという通俗的な理解は転換しつつある。だが〈統治性〉や〈生政治〉概念を強調することは、英米型の新自由主義批判にフーコーを持ち出す傾向に棹差すことにもなった。考察の対象は変化しても、フーコーを権力の理論家として「社会学的に」受容する傾向には変化がない。

（2）着想に至った経緯

フーコーは 1970 年代後半から 1984 年の死までの 10 年に満たない期間で〈統治〉概念を練り上げる。研究代表者は博士論文でこの過程を考察した。そしてフーコーが、古代哲学を考察する中で、統治概念に「自己と他者への統治」という本質的な定義を与え、この概念を用いて、自らの権力論と主体論を一元的に提示したことを明らかにした。

研究代表者の申請時点での研究は二つの問題点を抱えていた。(a)統治概念の展開を追うことに注力し、方法論の詳細な検討を行えなかったこと、(b)考察対象を 1970 年代半ば以降の著作に限定したために、以前の著作とその後の思想の関わりを検討できなかったことだ。

２．研究の目的

（1）本研究の目的は、1970 年代以降のフーコー思想に関する最新の研究状況に立脚し、1960 年代の著作を方法論的な側面から読み直すことにあった。1960 年代から 1970 年代にかけての思想的展開を、単なる対象の移動ではなく、問いの設定と方法論の展開として描き出すことを目指した。

（2）本研究によって 1960 年代のフーコー思想の全貌が明らかになるわけではない。しかし方法論的な検討を通して、フーコーが 1960 年代に行った文学論などの仕事のほか、1970 年代の「異常者」とされた人々のエクリチュールに関する研究に新たな視覚を提供することも期待されよう。また本研究の課題は国際的な需要に応えるもので、国際的な進展にも資するものだ。

（3）一次資料と最新の研究成果を踏まえた上でフーコー思想の特質を明らかにすることは、第二次大戦後のフランスを中心とした西洋哲学・思想研究全般にとっても大きな意義を持つ。ところでフーコーは、哲学・思想以外の人文・社会科学の諸分野で広く受容されている。アカデミズム以外の読者層の関心も高い。しかし残念ながら規律権力論の思想家という評価が根強く、最新の知見が浸透しているとは言い難い。したがって本研究の目的の一つは、従来の権力論偏重のフーコー像とは異なる像を描き、思想史研究の内外に斬新な問題提起を行うことにも置かれた。

３．研究の方法

本研究は文献研究を中心とした思想史研究であった。中心的作業として、フーコーの一次文献の読解と共に、関連する国内外の二次文献の収集と読解を行った。

（1）2010 年度

フーコー『知の考古学』（1969 年）を主な分析・読解の対象とした。まず関連文献の収集と分析を行った。このとき『知の考古学』での議論を言説分析の方法論の一般化の試みではなく、言説実践のはたらきをめぐる問いとして捉える方が、1970 年代以降の思索の展開との関連性をはっきり取り出せるとの仮説を立てた。たしかに『知の考古学』と同書に関連するフーコーの議論は、例えば『言葉と物』以前の内容をたびたび参照して進むものの、方法論をめぐる議論がフーコー自身の大きな関心のなかで行われていることも明らかだからだ。

ところでフーコーの思想は、考古学、系譜学、倫理の三類型論としてしばしば描かれる。これによれば 1960 年代後半から 1970 年代前半は考古学から系譜学への移行期にあたる。この見立ては『知の考古学』を言説分析の一般理論として受け止めるときの有力な根拠だ。しかし実際には、1970 年代の「系譜学期」の論点は、1960 年代半ばまでにおおむね登場している。また『知の考古学』が論じた意味での〈言説〉分析は 1980 年代まで続く。フーコーは 1960 年代にすでに系譜学的であり、1980 年代にいまだ考古学的だったと言うことは十分に可能だ。したがって当時のフーコーの方法論を論じるにあたり、時期区分にこ

だわることは生産的ではない。むしろ主題の連続性に重点を置きながら、社会問題や政治情勢への関与を深めていく、フーコーの態度と議論の変化に注目した方がよいだろう。以上のように研究の方向性を位置づけた。

具体的には『知の考古学』に登場する「出来事」の語を手がかりに考察を進めた。この語が、社会問題へのフーコーの関心の高まりと、後期フーコーの概念群とを橋渡しする役割を担っているのではと考えたからだ。フーコーは「出来事」の語を歴史上の「事件」という意味から切り離し、言説の形成と結びついた概念としての意味を与えようとした。この試みは〈知―権力〉という 1970 年代以降の権力論の展開につながる。他方で、このアプローチは、一回的な経験の分析によって自らの「現在性」を診断する〈出来事化〉の実践、すなわち非連続性の〈経験〉を問題化する後期フーコーの問題系とも通底する。

また、当時の社会情勢、とくに 1970 年代以降のフランスのあらゆる領域に大きな影響を及ぼした「六八年五月」とフーコーの関係を理解することも目的の一つとなった。この点について、翻訳作業（クリスティン・ロス『六八年五月とその後』）を進めると共に関連資料を収集し、当時の状況と思想界に与えた影響、ならびに「六八年五月」に関する研究の現状の把握に努めた。

このほか、2011 年 2 月から 3 月にフランスに渡航し、フランス国立図書館（パリ市）、現代出版史資料館(Institut Mémoires de l'édition contemporaine: IMEC)（カン市）で資料調査と文献研究を実施した。とくにフーコー関係史料の寄託先である IMEC では未刊行の一次資料に接するとともに、二次文献を参照して現状を調査した。また国立図書館では、日本国内ではアクセスが困難な関連資料・文献にも接することができた。

(２)2011 年度

前年度の問題意識を発展させつつ、『知の考古学』を当時の理論および社会状況との関係で考察した。とくにフランスの「六八年五月」とフーコーとの関わりに注意を払った。これはフーコー研究に関して言えば、フーコーはいつから「政治化した」のか、また 1970 年代以降の本人のラディカルな発言や行動が理論的著作とどのような関わりにあるのかという問いと交わる。

伝記的事実によれば、フーコーは 1960 年代半ばまで、他の思想家と比べても、とくに強い政治意識を持っていたとは言えない。政治的行動に積極的に関わる契機となったのは、1960 年代後半のチュニジア駐在時に接した現地の学生運動との関わりや、フランスの「六八年五月」に初めは国外から、後には国内から接した経験だった。理論面ではどうだろうか。代表的な例を挙げれば、アルチュセールとラカンに影響を受けた高等師範学校の左翼主義学生グループたちとの関わりなどから、フーコーは自らの理論的作業の特徴を明らかにすることが求められていた。すなわち 1960 年代末に、フーコーは一定の政治的状況の中に身を置いていた。以上を踏まえ、1960 年代から 1970 年代にかけてのフーコーの理論的思索について、主体を巡る問いがどのような連続性を保持しているのかを明らかにすることを研究の目標とした。

11 年度前半は『知の考古学』の主要概念である言表、アルシーヴや言説実践、言説形成体といった概念群と、主体や実践というフーコーに通底する問題設定、そして 1970 年代の統治の問題系との関係をつかむことができずにいた。他方、昨年度に着目した出来事概念も議論の枠組全体を支える概念としては力不足であることが明らかにもなった。

しかし 2011 年 9 月にロンドンで行ったカンファレンスでの口頭報告と大英図書館での文献調査を通して、二つの重要なポイントに気づくことができた。まず、フーコー思想で〈倫理〉や〈統治〉を問題にする際に、それらを規範的な議論とは関係なく位置づけることの重要性だ。じっさいフーコーが「倫理」の語で意味していたのは、個人や集団の振る舞い、またそれを規定する規則のあり方であって、普遍的に妥当する行動規範を定め、現行の規範の正当性を検証する作業のことではなかった。

次いで気づかされたのは、政治的主体性をめぐる問いをフーコーの読解に外から持ち込むことの意義だった。『言葉と物』までの著作にこの問いを持ち込むことは難しい。しかし『知の考古学』では事情が大きく異なる。もちろん同書の成立時期を考えれば十分に設定可能な観点だ。だがそれ以上に、政治的な論点や関心が抑制気味に書かれているからこそ、読み手の側から問いを持ち込むことに意義がある。この 2 点を軸に『知の考古学』の主に後半部を検討した。

なお「六八年五月」については、2008 年に 40 周年を迎えたため、近年世界各地で様々な振り返りが行われている。これに関連して、所属大学の研究者・院生と共に、西川長夫『パリ五月革命　私論』の合評会の開催に取り組んだ。また翻訳作業に携わることを通して、1970 年代から 1990 年代のフランスの社会政治状況と思想・哲学との関わりを詳しく理解することができた。

４．研究成果

(１)本研究の主な成果

本研究の主な成果は次の 2 点だ。第一に、1960 年代後半のフーコーが言説分析の諸概

念を実践の問題系に明確に位置づけたことに着目し、この時期以降のフーコー思想にとって政治的主体性の問いが重要性を占めていくことを指摘した点だ。第二に、こうした思索の展開が「六八年五月」と深い関わりがあると論じた点だ。

『知の考古学』が代表する 1960 年代後半のフーコーは、理論と実践という伝統的な枠組みに言説分析を収めることをよしとしなかった。そして言説とは、一定の規則に従って出現し、変容し、相互作用し、元の規則を変更するといったはたらきを通して、私たちの現実を作り出し、変化させる動的な実践であると論じた。本研究はこの事実に直接関連して、フーコーの方法論を理解する上での『知の考古学』の意義とは、当時の議論が言説の一般理論の提示を試みた点にあるのではなく、実践と主体の問いを浮上させたことにあると捉えた。

もちろんこうした政治に関わる問いは、1960 年代後半以降にフランス内外の社会情勢が緊迫する中で、フーコーに投げかけられた面も大きい。だがその事実とフーコーの理論の関わりについては、一般に考えられているように 1970 年代以降、本人とその思想があたかも突然「政治化した」と捉えるのではなく、『知の考古学』が政治と主体性に関わる問いを備えていたからこそ生じたと考えるべきだ。

フーコーの思想に関しては、考古学、系譜学、倫理という三類型論や、1970 年代半ばでの戦争モデルの放棄という理解が存在する。とはいえ 1960 年代半ばから 1970 年前後の文献を参照すれば、問いの移行や段階よりも連続や再定式化があることははっきり見て取れる。

本研究の意義と重要性は、政治的主体性という観点を導入することで、そうした「類型論」が見えにくくする、フーコー自身の問いの持続性と展開を明らかにしたことだ。また本研究は、後期フーコー思想を貫く統治の問題系を、主体性の問いとの関わりで捉えるという研究代表者の基本的主張を補強する。

このほか、翻訳作業を通して、「六八年五月」という出来事がフーコーらフランス現代思想の思想家に与えた影響の大きさと、「五月」後のフランスの思想状況についての見取り図を提供することもできた。

(２)成果の位置づけとインパクト

今日のフーコー研究は国内外を問わず、大別すれば芸術文化、社会学、哲学・思想、認識論などの領域に分化する。フーコー思想を政治の問いとの関係で読み解いた本研究は、このうち主に社会学と哲学・思想の領域に関わる。だが同時に、フーコー思想にとっての政治の問いの重要性を強調する点で、認識論的な議論も主体と実践の問いに引きつけて捉えるべきではないかとの問題提起も行っている。

狭義のフーコー研究で言えば、本研究の成果は、フーコー思想にとっての主体の問題の重要性を強調する立場を支持する。そして『知の考古学』の時期のフーコーにもこの立場が適用できることを示した点にインパクトがある。

またより広い文脈では、フーコー思想を現代社会の分析に応用することに関わる研究や議論が排除しがちな、当該社会理論の登場した時代背景や当時の学問的文脈に光を当てることで、応用研究の方法論や分析の対象領域の検討に示唆を与える役割を果たす。

(３)今後の展望

本研究により、1960 年代後半以降のフーコーの思想には、主体と実践、あるいは政治的主体性の問いが横たわっていることが一定程度明らかになった。他方で研究代表者にとっては、こうした問題設定そのものが 1960 年代後半以降の叛乱の時代と深く関わることを改めて自覚する機会にもなった。今後の展望としては、次の二つの方向性が考えられるだろう。

第一に、1970 年代後半のコレージュ・ド・フランス講義で取り上げられた自由主義論と新自由主義論が、社会叛乱と石油危機を経験した当時の西側世界での、国家に関する一連の議論の中でどのような位置づけを持っているのかを明らかにすることだ。この研究はフーコーの議論を当時の文脈に位置づけるだけにとどまらない。国民国家からグローバル化、地域統合、さらには〈帝国〉という流れの中で国家論の系譜をたどり直すことは、主権国家の消滅が近い将来の出来事ではなく、福祉国家の維持と債務・財政危機の解決が緊急の課題となっている現在、一定の有効性を持つだろう。

第二に、「異常者」をめぐる言説に関するフーコーの具体的な分析を、フーコー思想の全体像がかなりの程度明らかになっている現在の時点から読み直し、フーコーの当時の関心を取り出すとともに、それを思想の全体像の関係を解明することだ。この研究は言説分析の政治性や実践としての言説といった、フーコー自身が設定した認識装置がどのように作動しているのかを検討する良い機会となるだけでなく、今日の「異常者」にかかわる管理や統制の言説を考える上でも示唆を含むと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計２件）

① 発表者名：T. HAKODA，発表表題：Government over Resistance: Theoretical Signification of Foucault's Governmental Turn in the 1970s、発表年月日：2011 年 9 月 8 日、発表場所：ロンドン（英国）
② 発表者名：箱田徹、「『六八年五月』とフーコーの出来事概念」、学会名：社会思想学会・社会思想学研究会、発表年月日：2010 年 10 月 23 日、発表場所：神奈川大学（神奈川県）

〔図書〕（計２件）

① 著者名：クリスティン・ロス（翻訳・解説:箱田徹)、出版社名:インスクリプト、書名：『六八年五月とその後』、発行年：2012、総ページ数：印刷中
② 著者名：箱田徹、出版社名：慶應義塾大学出版会、書名：『抵抗と権力から統治の主体へ』、発行年：2012、総ページ数：印刷中

〔その他〕
研究会企画の共催および口頭発表
① 「西川長夫『パリ五月革命 私論――転換点としての 68 年』を読む」、立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクト「植民地主義研究会」、2011 年 11 月 18 日、立命館大学（京都府）

研究会での発表
① 発表者名：T. HAKODA，発表表題：Notion of Government in the Later Foucault: Art of Living and Associations、発表年月日：2010 年 7 月 12 日、発表場所：立命館大学（京都府） 研究会「MAUSS/Maussをめぐって――オルタナティヴの可能性 アラン・カイエ（Alain Caillé)、パリ第十大学教授を迎えて」での口頭発表

ホームページ
① Foucault, Michel ミシェル・フーコー、http://www.arsvi.com/w/fm05.htm 研究成果を踏まえたウェブページの共同製作と情報発信

６．研究組織
(1)研究代表者
箱田 徹（HAKODA TETSU）
立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドクトラルフェロー
研究者番号：40570156